

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十一年二月一日発行(毎月一回一日発行)
第十五巻第十号(通巻第一七八号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第178号

2. 2009

睨み鯛

品川 鈴子

膝くづし一人二役屠蘇ごっこ

太箸の女手迷ふ睨み鯛

睨み鯛先づは肋あばらへ箸はじめ

柳箸へも脂ぎる睨み鯛



喜寿の春 汝なれ 何歳の睨み鯛

睨み鯛 春着の刀自と一対一

元旦の睨み鯛 据ゑ刀掛

睨み鯛「浜屋」に育ち喜寿の春

初渚かつて塩田のささめ砂

初風の干満 測る 赫あか 礁いぐさ



玉

鈴

吟

兵庫 金田美恵子

その中に黄蘗一本冬木立
寒燈下摺り師のゆるぎなき手業
一切経納めし蔵の冷え籠る
底冷の蔵に版木の六万枚
一切経説きし摺り師の冬帽子

兵庫 唐鎌光太郎

暮早し戸棚の徳利取り出だす
温め酒自負控へ目に宮大工
木枯にそそと立ち去る吟行地
寒風をのがれ酒場に句を得たり
事なきを得て小春日の医院出づ

兵庫 川合まさお

動かせて見たきD51小鳥来る
豪快な河馬の息継ぎ石路の花
海苔筭の機材積み込む声高し
三味の音に立止まる秋潮入川
村雨と松風の墓碑落葉焼く

大阪 河村 泰子

みどり児と石路の日向の縁側に
産衣干す石路の黄色は細くゆれ
天使かも産衣にまたも天道虫
乳児の眼に紅葉吸ひ込まれんばかり
日短かや砂場に遊具二つ三つ

東京 北川とも子

深秋や雨雲集め榛名山
山々に霧たちこめて県境
地震ありし地の秋森の底にあり
晩秋の佐渡うつすらと明けにけり
秋深しとどまるごとく信濃川

兵庫 北島 明子

傘に聞く雨音もよし萩の道
人去れば瀬音高まる夕紅葉
御一行様と書かれて紅葉宿
まんじゅうを割ればあんこに秋にじむ
どんぐりのそれぞれの名を未だ知らず

兵庫 木原 今女

父在りし頃の生家に柿簾
十年後へ手紙を託し夕紅葉
初時雨通りすがりのかな書展
兄の技適はず熟柿川に落つ
曳船の綱真つ直ぐに秋気満つ

愛媛 木村 美猫

名画座の「カサブランカ」へ黄落路
銘酒の旗なびく紅葉の播州路
あばら家の沓脱石に石路あかり
和讃清く仏果得ずとも報恩講
日だまりに頬張るおむすび冬すみれ

兵庫 久保田由布

穴惑蛇身の視野は低からむ
紅葉狩一人が高所恐怖症
棲み馴れて吾を無視する寒鴉
千枚田稲架解かれみて無一物
桐一葉従姉の記憶欠落す

兵庫 藏本博美

花水木伊丹紅葉の第一号
妻逝けり老人ホームに秋惜しむ
緑野背に紅葉明かりの浮き立てり
もみぢ葉を銜へて妻のほほえみし
落ちてなほ柄を連ねあふ紅葉かな

兵庫 栗田武三

隅櫓日の薄々と冬めける
城郭の道へめぐれる空つ風
ひたひたと曝気の水輪浮寝鳥
落葉して織田長屋門静もれる
凧のプラットホーム明石城

大阪 小阪律子

燭灯し問わず語りの霧の宿
大杉に宿りし紅葉黄葉の帽
塩の道百体仏に草紅葉
曼珠沙華飛鳥美人のごと褪せて
落葉搔く老尼の背なの小さきこと

東京 後藤とみ子

米櫃を干す新米の届く頃
釣り人の佇む疏水冬浅し
蠟燭のとぼる中堂山紅葉
ロープウェー行きより帰りの紅葉美し
咳のあとしばらく声を低くして

大阪 小林 玲子

冷泉家橘の実のほつほつは
「為」の字のつづく家系図秋うらら
御文庫の白壁過る鴨一羽
御当主の丸鼻色白秋袷
冷泉家の畳滑らか萩の庭

薬草歳時記

(一七七) ヒイラギ(柀)

三 輪 慶 子

烈風の戸に柀のさしてあり

石橋 秀野

節分の夜、焼いた鰯の頭を柀の小枝に刺して門口に挿すという風習、うちの近所では見かけたことがないのですが、皆さんの所では如何ですか。悪鬼が柀の枝で目を刺され、鰯の匂いに閉口して逃げ出すと言うおまじない。土佐日記にも出てくる古い慣わしです。昔は鬼がこわかった。人を食う鬼、人をさらう鬼、その邪鬼たちが鰯の匂いに閉口して逃げ出すと思うだけでも愉快ですね。土佐日記には「なよし」と書かれています。なよしとは名吉とも書き鰯の事だとか、その昔は鰯だったのでしょう。

柀をさすのも節分の行事ですが追儺、鬼やらいの儀式は、中国の真似をして文武朝に始まったとか、疫病、飢饉が多発したようです。豆撒きをするようになったのはもともと後の十五世紀頃です。疫病や災害が多いほど鬼を祓って新年を平らかな年にしたいという思いが強くなったのでしょうか。

柀はモクセイ科、モクセイ属。雌雄異株の常緑樹です。

十一月にはギンモクセイに似た白い花が咲きます。従って柀の花は初冬の風景です。キンモクセイのように芳香を持っています。葉の先端は刺状に尖り、葉のふちに刺状の鋸歯があります。若木の葉の刺にさわるとひりひり痛むことから、柀という名は疼木の意味なのです。ところが柀も五十年を経た老木になると葉は小さく刺も丸くなります。邪気をはらう呪いに使うほどですから薬効があると期待しておりましたが、薬草としては記録がありません。

葉が柀に似ているヒイラギナンテンはメギ科の常緑樹で葉に薬効があります。庭木として馴染み深いものです。春先に黄色い花をつけますが、歳時記には見当たりません。十大功労葉という大層な名前がついています。ベルベリン、パルマチン、ヤトロルジンを含みます。メギ科の南天と同様に咳止めの効果があります。

以前門口にヒイラギナンテンを植えていて、葉の刺に閉口したことがあります。ヒイラギナンテンも古木になると刺が丸くなるのでしょうか。今は伐ってしまったて確かめようもありません。実は藍黒色でブルーベリーのような大きさ、実にも薬効があります。葉や実を煎じて内服します。今年の節分には柀の替わりにヒイラギナンテンを使って邪気を祓うと清熱作用で世の中も落ち着くかもしれません。

参考文献 「牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

「角川俳句大歳時記」角川書店

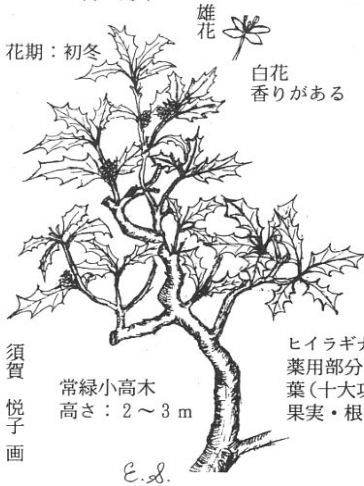
著者略歴神戸薬科大学卒

ヒイラギ [モクセイ属] (モクセイ科)

Osmanthus ilicifolius Mouillefert

柎・柎木

花期：初冬



須賀悦子画

常緑小高木
高さ：2~3m

ヒイラギナンテン
薬用部分：
葉(十大功劳葉)・
果実・根・茎

液果

ヒイラギナンテン[ヒイラギナンテン属](メギ科)

Mahonia japonica (Thunb.) DC.

(中) 華南十大功劳



総状花序
花：黄色
花期：早春
奇数羽状複葉

常緑低木
高さ：約1~2m

柎の花は光にまばたかず	柎の花にかぶせて茶巾干す	柎の花一本の香かな	柎の花のともしき深みどり	粥すくふ匙の眩しく柎咲く	寒天に大晴れしたる花柎	柎の花こぼれゐる下駄履かな	父なくて柎を挿す母の背よ	花柎密語に刺のまじりける	柎をさすや築地の崩れまで
*北島 明子	阿部みどり女	高野 素十	松本たかし	長谷川かな女	飯田 蛇笏	飴山 實	草間 時彦	品川 鈴子	蝶 夢

(*) ぐろっけ

鈴の奏

品川鈴子選

踏まれても蹴とばされても敷枯らし 香川 石川 裕美

ヨロヨロと靴より出でて秋の蜂
入れ歯なき口にツルツル熟し柿

秋暮るる皿まで舐めし肥満犬

足袋三足干す藤間流師匠宅 東京 遠藤とも子

遠き日の少女誌繰りて落葉の日

気がかりの仕事すませて秋夜汽車

編みかけのセーター何年越しのまま

山寺の黄葉仏の目に入り 兵庫 伊勢ただし

文化の日城に英語の案内人

隣隣草天竜川を攻め上る

姥堂を超えて極楽紅葉山

稚の目に映りて秋の海澄めり 大阪 河村 武信

稚を抱き点袋にも菊の柄

朝寒に御包引き寄せ稚の足

鷺一羽佇む枯野古稀迎へ

白壁に映ゆる内子の吊し柿 兵庫 山口 博通

籠ならぬ車の登城天高し

世紀経し坊ちやん電車秋うらら

秋風にタルトづくめの子規の町

黄落の有馬の銀杏仁王立ち 兵庫 林 美智

一人住む祖母の気がかり七五三

簞り立つ磐に寄り添ひ櫛紅葉

新車きて家族総出の紅葉狩

葱刻む軽ろき音せり今朝は晴 兵庫 上田 幸夫

愛犬は未婚の母に冬ぬくし

冬籠声軽ろやかに留守電話

狂ほしき夜やもしれぬ浮寝鳥

荒縄を靴巻き歩荷秋の尾瀬 兵庫 福島 悠紀

石室の人形あまた実南天

軸を変え額をかえたり秋座敷

レストラン色づきそむる水木の実

色鳥が訪ね来る庭餌付台 兵庫 伊藤 公女

七五三車整理の人も出て

秀 鈴 記

踏まれても蹴とばされても藪枯らし 石川 裕美

藪枯らしはブドウ科の蔓性多年草で、荒地や道端の生け垣などに旺盛に茂り巻鬚で他の植物に絡んでは、藪も枯らすほどので貧乏葛の名もある。踏んづけても蹴飛ばしても、じつと耐えて相手を枯らし尽くす。何食わぬ顔の逞しさはむしろ天晴れで、すぐ動揺し勝ちの我々には真似のできない生き様。

足袋三足千す藤間流師匠宅 遠藤とも子

和装離れの近頃では通りすがりに足袋が干してあるのが珍しい。たまに穿く余所行き足袋は、大抵クリーニングに出すが、しかも三足も丁寧の手洗いとは、一体どんな住人だろうかと興をそそられる。

それまで無関心だった当主のことを聞いてみると、藤間流の家元とか。内弟子が日々の稽古に足袋を洗うのも伝統芸能の修行のひとつ。

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 野口喜久子 〃

* 選句は全て 品川鈴子

文化の日城に英語の案内人 伊勢ただし

日本の古城を訪ねる外国人のために、英語で詳しく案内する人がいるのは、文化の日にふさわしい。城にはその国々の文化が連綿と伝わっていて、他国の者にも文化の詰まった殿堂として理解を深め易いところ。

朝寒に御包おくろみ引き寄せ稚の足 河村 武信

母子共に元気で退院の様子が伺われます。日中は暖かくとも夜中夜明けに著しく気温が下がりその較差が肌寒を感じさせる晩秋。

一揃え準備していた中から早速御包をそっと掛け、これで一安心と思いきや、肥立ちも順調な赤ん坊ほど足をばたたく。親の心子は知らず、とでも。

世紀経し坊ちゃん電車秋うらら 山口 博通

「坊ちゃん」夏目漱石の小説。明治三十九年雑誌ホトト

ギスに発表。田舎の中学校へ赴任した江戸っ子教師の若き正義感を明るくユーモラスな気分で描写したもの。

百年を経てその名残りを留める電車は、観光客に親しまれ乗ってみたいくなります。季語が往時をしのぶに相応しく心が和む句です。

新車きて家族総出の紅葉狩

林 美智

一読して心が浮き立ち家族の和むさまが想われます。車を買って替える家族会議の末の事でしょうか。色は赤、ブルーそれともシルバークレー想像が楽しいです。残暑が長引き丁度紅葉の季節。仲睦まじい一家総出の小旅行と察しられます。ハンドル捌きにはくれぐれも。

冬籠声軽ろやかに留守電話

上田 幸夫

最近暖房も簡単にでき便利になりました。掲句の冬籠は恐らくホーム炬燵で、電話のベルにも気付かずの寝入りよう、ところが目覚めれば留守番電話の点滅、慌てて受話器をとればそこに案内嬢の爽やかな声。一瞬の出来事がうまく佳句になりました。

軸を変え額をかえたり秋座敷

福島 悠紀

地球温暖化の影響でいつまでも残暑をもたらす昨今、作者は自から座敷の模様替えに取りかゝり秋を待ちわびるさまがよく分かります。心も爽やかになり、やがて夕暮れには虫の音も聞こえましょう。

「夏座敷」「冬座敷」は歳時記に記載されていますが、春秋は無いのを知り学んだ次第です。

足元に紅葉飛来る無人駅

伊藤 公女

時は晩秋から初冬の折、都会から遠く離れた村里の駅、時刻表と睨み合ひながら電車を待つ間の出来事。「紅葉飛来る」ずばり省略の中に余情深まる佳句に辺りの景色までが目に浮かんできます。秋の佻びしさから作者の心象まで。

雨傘の上にはぼつたり熟し柿

水上 貞子

笑ってよいのやら、惜しいと悔やむべきだろうか。栗原憲司の「熟柿といふはらわたの如きもの」の句に匹敵する思いです。恐らく霜に当り紅く熟す渋柿でしょう。掲句からは作者の傘の上に落ちたのか曖昧ですが「ぼつたり」とはユーモアの中に実感が良く出た佳句になりました。

(以下略)